

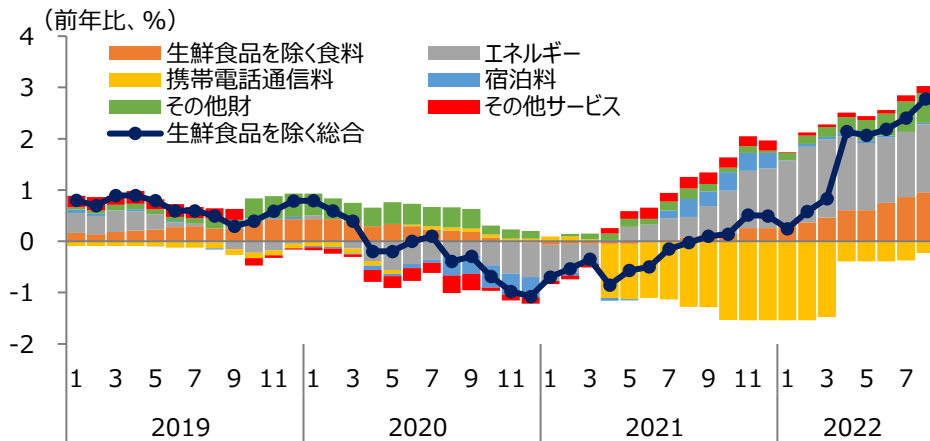
日本

消費者物価指数（2022年8月）

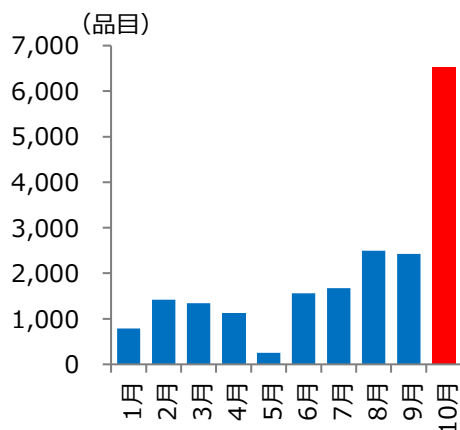
食品値上げ10月に集中、コアCPIは年内に一時3%台へ

政策・経済センター  
堂本健太  
03-6858-2717

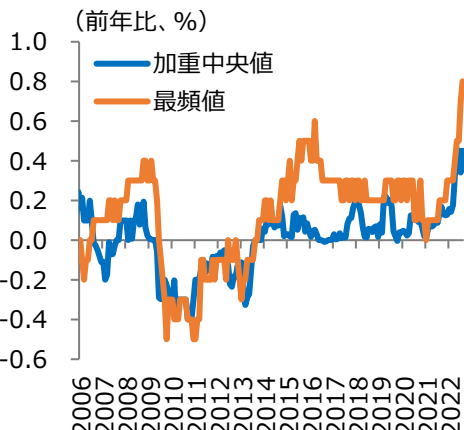
## 1 消費者物価指数（生鮮食品を除く総合）

注：消費税増税の影響を含む  
出所：総務省「消費者物価指数」より三菱総合研究所作成

## 2 22年の食品値上げ品目数

注：8月31日時点。品目数は再値上げなど一部重複を含む  
出所：帝国データバンク「食品主要105社」価格改定動向調査」より三菱総合研究所作成

## 3 消費者物価の基調を示す指標

注：加重中央値は、価格上昇率の高い順にウエイトを累積して50%近傍にある値。最頻値は、品目別価格変動分布において最も頻度の高い価格変化率。  
出所：日本銀行「基調的なインフレ率を捕捉するための指標」

## 評価ポイント

## 今回の結果

- 8月の消費者物価指数（生鮮食品を除く総合、以下「コアCPI」とする）は、前年比+2.8%（7月同+2.4%）へ上昇し、消費税増税の影響を除けば1991年9月以来の高い伸びとなった（図表1）。
- 内訳では、「エネルギー」（前年比寄与度+1.3%p）のプラス寄与が大きい。春頃までの原油価格上昇を受け、電気代やガス代が上昇した。足許で国際的な原油価格は下落しているが、ガソリン代は燃料油価格激変緩和補助金により価格上昇が抑制されており、小売価格の下落につなげにくい。
- 「生鮮食品を除く食料」（同+1.0%p）は、プラス寄与拡大傾向が鮮明だ。原材料価格や輸送コスト高騰、円安の影響により、調理食品、菓子類をはじめ、幅広い品目で価格上昇が続いている。
- 加えて、「携帯電話通信料」（7月同▲0.4%p→8月▲0.2%p）の格安料金プラン拡充の影響が一部剥落したことも、コアCPIの伸びを押し上げた。

## 基調判断と今後の流れ

- 消費者物価は、円安・資源高等、コストプッシュ要因から高い伸びが続いている。
- コアCPIは、10月にも前年比+3%台へ上昇する見込みだ。特に食品価格上昇の影響が大きいとみる。帝国データバンクの調査によると、10月の値上げ対象は6,532品目と、22年中でも突出して多い（図表2）。原材料価格高騰、原油高、円安によるコスト増から、値上げに踏み切る企業が続出する模様だ。
- その後、23年後半にかけて、コアCPIは前年比+1%台に鈍化する見込みだ。商品価格高騰は一服しており、エネルギー、食料のプラス寄与は縮小するだろう。
- もっとも、消費者物価の基調を示す「最頻値」や「加重中央値」は、比較可能な2001年以降で最高水準にあり、日本の粘着的な価格設定行動にも変化の兆しがみられる（図表3）。経済活動正常化に伴う内需の拡大を背景に、23年以降も緩やかな物価上昇が続くと見込まれる。